

〔論 文〕

牧会者カルヴァンの形成

井 上 政 己

ここに一通の書簡がある。部分的に以下摘要私訳する。

さて、例の大先生には困ったものです。私たちの意見を受け入れてくれるなら、それにまざる喜びはありませんが、そうでなければ、なにも、あの大先生ただ一人が、広いキリスト教会でお偉いわけではありません。……大先生の信仰の姿勢を疑うわけではありませんが、好ましかるざる評価をよく耳にします。大先生の場合は、福音の真理に固く立って一歩も譲らぬ、というよりも、ただ単に、自説に固執するかたくなさに過ぎない、等々。……いやはや、大先生の聖餐論たるや！全くお話になりません。マルキオン異端すれずれとすら言いたくなります。……ですから、貴兄が、大先生に対して、何らかの影響力をお持ちなら、存分にそれを發揮して下さい。自分自身よりも、キリストにこそ従うように、たしなめてやって下さい。……私たちはみな、自らの過ちを告白し、悔い改めるに、やぶさかであつてはなりません。その意味では、貴兄のこれまでのいい訳がましい、煮えきらない態度にも、はっきり申し上げて、いたく心を痛めております。勿論、貴兄ご自身この点反省しきりであろうと存じますが。……確かに、両者の板挟みになつて苦心慘憺、

貴兄のお立場はよくわかります。実に難事でありましょう。しかし、仲保者の役割を自ら買って出られたのですから、最後まで最善を尽くされますように。たとえ成功の見通しは暗くとも、出来る限りのことをなさってくださいますように。……随分口幅つたい言い草ですが、お気を悪くなさらないでください。正しいと信じることを、齒に絹着せずに、ずばり直言するのが、小生の気質です。小生の真摯な気持ちをくみとってください。当たり障りのない、きれいな事ばかりを並べ立てる偽善者とは違います。巧言令色少なし仁、です。……厄介な調整役ではありませんが、真理を曲げてまで歩み寄るのはいかがかと、案じております。弱い兄弟に対する配慮だと貴兄はおっしゃる。そうして、貴兄の妥協を正当化なさる。しかし、敢えて進言いたしましょう。キリストをあらゆる人に受け入れられるものとするその行為は、新しき福音を捏造することであり、実にゆゆしき事態です。……^①

日付は一五三八年一月一二日。書簡の受取人はマルティン・ブツァー。差出人はジャン・カルヴァンである。この時カルヴァン弱冠二十八歳。ブツァー当年とつて四十七歳。文中「大先生」とあるのはほかあろうマルティン・ルターへの言及である。

書簡は全編通じてルターの人物と神学（就中その聖餐論）に対する徹底した否定的な見解とブツァーの行動に対する苦言・批判で満ちている。ルターとその聖餐論に関してはここでは措く。本稿の関心は専らカルヴァンとブツァーの関係である。

この時期カルヴァンが厳しくブツァーを批判した背景には二つのことが考えられる。一つ目は、ブツァーがメラニヒトンらルター派と妥協に妥協を重ねつつようやく締結に漕ぎ着けたヴィッテンベルク協定をカルヴァンのジュネーブ教会をはじめとするスイス諸教会に押し付けようとしていたということ。二点目は、

一五三四年に出た *Defensio contra episcopum Abriensum* の中でブーツァーが教皇派（とカルヴァンらが呼ぶ）
習わしたローマ・カトリック教会）との一致を熱望するあまり *sola scriptura* の理念においてすら歩み寄る
ことを辞さなかったことが、カルヴァンに大いなる危機感と不信感を抱かせたということ。

約めて言えば、この時期のカルヴァンの目にはブーツァーという人物はイソップ寓話の蝙蝠としか映じな
かったであろう。片やルター派と根回し・駆け引きの末聖餐論において譲歩し、片や教皇派ににじり寄り
聖書論において理念を曲げる。四畳半の座敷芸に長けた節操のない、信念を貫くことをしない、信賴するに
足らぬ人物と、ブーツァーの教会一致のための奔走を全く評価しないのである。「真理を曲げてまで歩み寄る
のはいかなるものか」と。更には、「キリストをあらゆる人に受け入れられるものとするその行為は、新しき
福音を捏造することであり、実にゆゆしき事態です」とまで断じていたのであった^②。これは明らかにガラテ
ヤ書一章「ほかの福音」への言及である。一章一〇節には「人に取り入ろうとしている、人の歓心を買おう
と努めている」ともある。これはまさに、弱冠二十八歳の駆け出し牧師カルヴァンが自らを使徒パウロにな
ぞらえ、二十も年長で押しも押されぬ大牧者にしてヨーロッパ中に名の知れた宗教改革の大御所ブーツ
ァーをたしなめるの図なのである。正義は我にあり、我こそは真理の全体を把握する者なりとばかりに、駆
け出し改革者カルヴァンは厳しい叱責を大先輩ブーツァーに浴びせかけたのであった。

一種のエリート意識をカルヴァンは終生持ち続けることになるが、しかし、それは二十代に最も顕著であ
る。カルヴァンは十六世紀最高の頭脳のひとつであったと言い切っている。であるが、いや、であるからこ
そ、己が天才に頼む優越感とそこより生ずる高慢に襲われる。そういうカルヴァンは、人の弱さをがまんでき
ない。頭の悪い奴に対する忍耐がない。一般大衆・民衆を理解できない。好きになれない。

大御所ブーツァーですらこの激評に晒されるのであるから、並みの人間はまったく悲惨を極める。ベルン

教会のクンツ牧師は「どうしようもない田舎者で、神学的素養皆無、記憶力が悪く、二言目には、言葉に詰まる。説教者不適格」と容赦ない。バーゼル滞在時代の良き友グリユナエウスは、こうしたカルヴァンを諫めるべく書を認めている。君の評する通りクンツ牧師は立ち居振る舞い粗野、学問も教養もない、ラテン語とてまともに話せない、けれども、主に在る同労者、兄弟ではないか。スイスアルプスの山奥で生まれ育ったクンツ君とフランス生まれで、今日望みうる最高の教育を受けることが許された君と比べる方がどうかしていやしまいか、と。そして、「弱い人々には、弱い者になりました。すべての人に、すべてのものとなりました」と使徒パウロの言葉にカルヴァンの注意を喚起する。^③

もう一度言う。疑いなくカルヴァンは十六世紀最高の頭脳であった。いや、キリスト教会史上最高と言ってもいい。大局を見誤ることなく枝葉を見落とすことなく真理を把握し、しかもそれを簡明かつ典雅に伝達しえた稀有なる頭脳である。確かに、真理をカルヴァンは見据えていたであろう。正義はカルヴァンにあったであろう。けれども、正論が正論であるという理由だけではまかり通らないのが人の世である。ましてや、牧会のむずかしさよ、である。牧師が相手にするのは、鼻から息を吐き、切れば血の出る生身の人間。意地もあれば、感情もある。若きカルヴァンには、このあたりの人情の機微がわからない。正論の前には意地も引つ込む、真理のまえに感情論なし、と冷徹に切り捨てる。

己が天才に絶大な自信を寄せていたカルヴァンが、その人生において最大の蹉跌をきたしたのは、神学研究や学問の領域においてではなく、教会における牧会者としてであったことは意義深い。

一五三八年四月二十一日イースター。聖餐式執行を巡る対立、市民の道德的墮落ぶり、福音を嘲る者らを市議会が看過していることなどへの抗議から、カルヴァンとファレルは全教会員の倍餐を拒否。この聖餐式執行ボイコットに打って出たカルヴァン、ファレルそしてクロー三人の牧師を市議会は解任、三日以内にジ

ユーネーブ市を立ち退くことを命じた。この決を受けてカルヴァンは依然気炎を吐く。我々は人に仕えてはいない、大いなる主にお仕えしているのである、と。依然真理はわれにあり、正義はわれにあり、である。人ではなく神に仕えると喝破するカルヴァンであつてみれば、人によつて解任されるという道理のものではない。よつて、ユーネーブ市の解任を受け入れずこれを不服としベルンに訴えた。ベルン市当局は教皇派巻き返しを危惧してカルヴァン・ファレルとユーネーブ市の仲に立ち帰還がかなうかに見えた土壇場でこれを妨げ阻止したのは、つい先ごろカルヴァンが「どうしようもない田舎者で、神学的素養皆無、記憶力が悪く、二言目には、言葉に詰まる。説教者不適格」とこき下ろしたベルン教会のクンツ牧師であつたとはまさに人間ドラマといおうか。

かくして、二年足らず牧したユーネーブ教会をカルヴァンはしくじつた。それは元々自ら望んで得た働き場ではなかつた。ファレルの恫喝により神のみこころと信じればこそ引き受けた茨の道であつた。ユーネーブにおける牧会生活を振り返つて「日々千回も苦しむあの十字架よりは、むしろ百度様々な死を経験する方がまし」^④と洩らしている。しかもその教会の働きが甚だしい失敗に終わつた。神のみこころだつたのではなかつたのか。正義は自分にこそあつた、自分は真理を貫いたに過ぎない、なにがいけなかつたのか、なぜなのか、自分は牧師に向いていないのではないか、牧師の召しがないのではなからうか。カルヴァン胸中の苦吟を察するに難くない。

ユーネーブを追放されたカルヴァンはバーゼルのグリユナエウスの処に身を寄せる。かつて『基督教綱要』を上梓した町である。ルネサンス・ヒューマニズムが盛んな出版界の要都バーゼルで、ファレルによつて牧会のはたらきに引きずり込まれる前の、静かに学究に住みなす生活に戻ることであつたらしい。けれどもカルヴァンにもたらされたものは、バーゼル大学教授の席でも、ローマ古典の註解書執筆でも、神学

書完成でもなく、意外や牧師招聘であった。しかもその招聘は意外な町の意外な人物からもたらされた。ストラスブールのブツァーである。

当時のストラスブールはドイツ語圏であった。この町に国境を越えてフランスから亡命する者たちがあった。教皇派から福音主義に転じたがゆえに国を捨てることを余儀なくされた人々である。亡命者たちは自分たちのためにフランス語教会を創設した。しかし無牧である。このフランス亡命者の教会の牧師として赴任してほしいとブツァーはカルヴァンを招いたのである。ブツァーの度量にはまさに賞賛すべきものがある。しかも、この招聘はストラスブール市によるものでも公にストラスブール教会によるものでもなく、ブツァー（そしてカピトー）の個人的裁量によるものであったと思われる節が濃厚である。

かくて一五三八年九月カルヴァンはストラスブール教会の招聘に応じてその町のフランス亡命者教会の牧師として就任する^⑤。自らに対する神の召命と賜物について祈り抜き考え詰めてきたカルヴァンは、あつけないと形容したくなるほどあつさりとパーゼルの学究生活を捨ててストラスブールの牧会生活を選び取ったのであった。牧師として神からの召命がないのか、牧会の賜物がないのか、と思い悩んでいたカルヴァンにブツァーは今一度牧師として立つ機会を提供したのである。

友人のデュ・ティレはカルヴァンのストラスブール赴任が本当に神から出たものであるのか、人からのものではないのか、生活の安定を求めてこれに飛びついたのではないのか、と問い質した^⑥。それに対するカルヴァンの返書はストラスブール教会を通して神がこの私を召してくださいのだという確信と平安に貫かれている^⑦。生活の安定のために招聘を受けたなどでもない誤解である、牧師給は文字通りゼロなのだよ、と。

パーゼルに落ち着き学問と著述に専心する生涯を全うすることもできたであろう。しかしカルヴァンは謝

儀も出せない小さなフランス亡命者教会の牧師としてストラスブルに赴いた。これはカルヴァンの生涯において最も重要な決断のひとつと云っていい。この時カルヴァンは真の意味で牧師として歩み始めたのである。教会のはたらきに生涯を献げることを決意したのである。

余談ながら、牧師としては無給であったが、カピトールの計らいで一五三九年一月からギムナジウムで聖書を講じることとなり、これに対して年俸五十二フロリンが支払われることとなった。しかし実際に支払いが開始されたのは半年後の五月からである。カルヴァンは貯蓄を取り崩して生計^{たづき}を立てたが、この冬を越すのに飢えと寒さで生命すら脅かされる状況で、蔵書売り食いした形跡もある^⑧。もともと年俸の五十二フロリンというのはまさにお気持ち程度でそれをもって生活が成り立つといった額ではない^⑨。やがてカルヴァンは生活のため及び牧会的・教育的考慮から自宅に下宿生を置くことを始める。あの人間嫌いカルヴァンが、あのエリートの優越意識過剰のカルヴァンが、である。

ストラスブル時代はカルヴァンを人間として牧師として神学者としてひとまわりもふたまわりも大きく成長させた^⑩。ストラスブル教会を代表してドイツ語圏における重要な教会会議に出席したことは、カルヴァンの宗教改革に対する視野拡張と認識を深めるの結果となった^⑪。これらの会議を通して生身のルター派に接したことは彼らに対する偏見を取り除きカルヴァンの態度に変化をもたらした。殊にメラニヒトンとの間に、ダビデ、ヨナタンと呼び合える深き理解と厚き友情を得たことは終生の宝である。当然ルターに対する評価もコペルニクス的に転換する。ルター神学の本質的な意味における後継者はルター派ではなくカルヴァンの中にこそ見出されると言い切ってもかまわない。かつてヴィッテンベルク協定妥結に奔走したブツァーを、無定見、節操がない、身売りだと厳しく批判したカルヴァンが、早くも一一五三九年五月にはツヴィングリの聖餐論を信奉するチューリッヒの神学者を向こうに回して、ヴィッテンベルク協定とブツァー

の立場を躍起になって擁護しているのを私たちは見出す。それにとどまらず、教会一致のブーツァーの悲願は、カルヴァンがそっくり受け継いで終生このために肺肝を砕くことともなるのである。^⑫

あたかも繕っていた網も舟も捨てて主の召しに従ったカルヴァンであったが、バーゼルで捨て去ったかに思えた学問・著作の道もまたストラスブルにおいて開かれる。ギムナジウムにおける聖書講義から生まれたロマ書注解書がそれである。これは死によって中断されるまで取り組み続けた聖書註解・聖書講義・聖書講義の初穂であった。また、かつてバーゼルにおいて出版した『基督教綱要』の抜本的な改訂増補を経た第二版もストラスブル時代の実である。第二版においては牧会論、教職論といった重要な章が書き足された。この時期のカルヴァンの神学的関心を如実に示していると同時にブーツァーの影響も色濃くあらわれている。^⑬

ジュネーブにおいては試行錯誤の末失敗に終わった改革されたる教会にふさわしい礼拝形式と教会音楽の模索に対する答え、いわば新しいぶどう酒を容れる新しい皮袋を、ブーツァーの教会形成に見出すことができた。詩篇歌、礼拝形式（リタージー）、長老制による教会政治、信徒訓練・教会訓練等の導入と強化である。これらはすべてブーツァーがストラスブル教会において実施していたものをカルヴァンがフランス亡命者教会に持ち込み練り上げ、後にジュネーブ教会にもたらしこととなる。

私生活においては結婚をあげておくべきであるかもしれない。

しかし、何と言っても、ストラスブルにおける最大の収穫は牧会者としての訓練と成長そして人間的な円熟であった。ブーツァーという、当代一流の聖書学者にして性格円満で円熟した人格を持ち酸いも甘いも噛み分けた人間通の大牧師が、傷ついた雛鳥をその計り知れなく深い懷に抱くようにして癒し導き鍛えることによって、天才カルヴァンの牧会者としての賜物がみごとに磨かれたのであった。

ソルボンヌ、オルレアン、ブルジュ三つの一流大学とパリ王立研究所において神学、法学、ルネサンス・ヒューマニズムの研鑽を積んだカルヴァンが、ストラスブールのブーツァーのもとでは牧師として必要不可欠な訓練を受けたのであった。ストラスブールでの三年はカルヴァンの神学校であった。

ストラスブール滞在中もそろそろ丸三年を迎えようという頃、教会改革の事業が巨大な暗礁に乗り上げ身動きが取れなくなったジュネーブは、カルヴァン再招聘を願う。ファレル宛書簡にカルヴァンは言う。「もしこの選択が私の自由に任されているのであれば、ジュネーブ復帰以外のことならなんでもあれ選択したい。しかし、この身が私自身のものではないことを思い起こすとき、我が心を、ほふるべき供え物として、主にお捧げします」^⑮全焼のいけにえの覚悟で一五四一年九月ジュネーブに復帰。わずか三日の猶予をもって国外退去を命じ武力行使で再入国を妨げたあのジュネーブである。そしてこの地がカルヴァンにとって終の棲家となるジュネーブである。

九月十八日帰還後初めての説教をカルヴァンはする。固唾を飲んで第一声を待つ大会衆。三年振りに聖ピエール大聖堂の講壇に立ったカルヴァンは、あたかも先週の続きであるかのように、三年前の追放によって中断された聖書箇所から講解説教を再開。自分を追放した連中への批判もなければ、追放しておきながら、苦境にみまわれると、手の平を返す様に再招聘を要請してきた者たちへの皮肉もない。実に淡々たるものであった。

ストラスブールからジュネーブに戻って一ヶ月余の一五四一年十月十五日カルヴァンを氣遣うブーツァーに近況を報告する書簡を認めている。冒頭に引用した書簡と比べ読むとき、三年間のカルヴァンの成長・成熟振りは、実に顕著である。

この者の行いが、ブーツァー先生のご期待通りでないなら、この者が全く先生の權威の下にいることを思い起こして下さって、どうか、ご忠告下さい。お叱り下さい。父がその子になすであらうことをすべてして下さい。^⑥

注

- ① Herminjard, no. 677, 4: 338-349; CO 10b, no. 87.
- ② ジュネーブ市立図書館に保管されている書簡（自筆原稿は現存せず。同時代のものと推定される第三者による写しのみ）には“Ego vero pro meo more tibi respondeo, si vis omnibus facere Christum plausibilem, tibi non esse fabricandum evangelium.”とあり、Herminjard も、そして Herminjard に完全依存する CO も当然ながらこれに準じているが、このラテン文は意味を成さない。写しを作った者が“nouum”を“non”と誤写したと判断して「新しき福音」と訳す。
- ③ Herminjard, no. 691, 4: 379-384; CO 10b, no. 97.
- ④ Herminjard, no. 857, 6: 199.
- ⑤ 九月八日聖ニコラス教会において第一回の説教を行った。それ以降カルヴァンは毎週四回説教を行うこととなる。Emil Doumergue, *Jean Calvin: Les Hommes et les Choses de son Temps*, 7 vols., (Lausanne, 1899-1927), 2: 358.
- ⑥ Herminjard, no. 742, 5: 103-109.
- ⑦ Herminjard, no. 754, 5: 161-165.

⑧ 同註。Hugh Y. Reyburn, *John Calvin: His Life, Letters, and Work* (London: Hodder and Stoughton, 1914), pp. 80-96; "Calvin was appointed to teach theology at a salary of 52 guilders per annum. The first instalment was paid six months after his arrival, in May, 1539. During the winter months which intervened between his arrival and this payment he nearly perished of cold and hunger. He had to sell many of his books to keep himself in food." ｼﾝﾊﾞｰ Williston Walker の蔵書売り食う説は異や言へぬ。John Calvin: *The Organiser of Reformed Protestantism 1509-1564* (New York: G. P. Putnam's Sons, 1906), p. 220: "It is not probable that he sold his personal library, as has often been said; though something came to him from the sale of books belonging to Olivetan's estate." ｼﾝﾊﾞｰオリヴェータンの遺産売却特にその蔵書売却の詳細なリストが現存。Hermingard, 6: 13-26 参照。

⑨ 物価や生活習慣が大きく異なるので現在の価値に換算するとは困難だが、当時のフロリン（ただｼﾝﾊﾞｰ）ではフィレンツェのフロリンではなくライン地方のフロリンで若干金含有量が少なう）の金含有量だけから単純計算を試みると、五十二フロリンは十五、六万円とｼﾝﾊﾞｰたｼﾝﾊﾞｰか。

⑩ カルヴァンのストラスブール時代に關しては、たゞﾊﾞﾙﾃﾞ Doumergue, 2: 293-649, Bernard Cottret, Calvin: *A Biography*, trans. Wallace McDonald (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 2000), pp. 132-156, Alexandre Ganoczy, *The Young Calvin*, trans. David Foxgrover and Wade Provo (Philadelphia: The Westminster Press, 1987), pp. 120-127, Hastings Fells, Martin Bucer (New Haven, Connecticut: Yale University Press, 1931), pp. 225-237, Williston Walker, *John Calvin: The Organiser of Reformed Protestantism 1509-1564* (New York: G. P. Putnam's Sons, 1906), pp. 216-244, Hugh Y. Reyburn, *John Calvin: His Life, Letters, and Work* (London: Hodder and Stoughton, 1914), pp. 80-96, R. N. Carew, Calvin

(London: The Centenary Press, 1933), pp. 88–101, J. Rott, “Documents strasbourgeois concernant Calvin,” in *Regards contemporains sur Jean Calvin* (Paris, 1965), pp. 28–73.

⑪ ハゲナウ、ヴォルムス、レーゲンスブルク（リッティスボン）での教会会議とカルヴァンに關しては、たゞ
 へゞゞ Doumergue, 2: 588–649, Wilhelm H. Neuser, “Calvins Beitrag zu den Religionsgesprächen von
 Hagenau, Worms und Regensburg (1540/41),” in L. Abramowski und J. F. G. Goeters, eds., *Studien sur
 Geschichte und Theologie der Reformation* (Neukirchen-Vluyn, 1974), pp. 213–237.

⑫ John T. McNeil, *Unitive Protestantism: The Ecumenical Spirit and Its Persistent Expression* (London: 1964), W.
 Nijenhuis, *Calvinus Oecumenicus: Calvin en de eenheid der kerk in het licht van zijn briefwisseling* (’s-Gravenhage,
 1958) 參照。

⑬ Willem van’t Spijker, *The Ecclesiastical Offices in the Thought of Martin Bucer*, trans. John Vriend and Lyle D.
 Bierma (Leiden: E. J. Brill, 1996), *Elsie A. McKee, Elders and the Plural Ministry: The Role of Exegetical History in
 Illuminating John Calvin’s Theology* (Geneva: Librairie Droz, 1988) 參照。

⑭ Ford Lewis Battles, “Calvin’s Humanistic Education” in Robert Benedetto, ed., *Interpreting John Calvin*
 (Grand Rapids, Michigan: Baker Book House, 1996), pp. 47–64 參照。

⑮ “Cor meum velut mactatum Domino in sacrificium offero” (Hermijnard, no. 903, 6: 339)

⑯ “Et si qua in re spei vestrae non respondeam, scis me sub tua potestate esse. Admoneas, castiges, omnia
 facias quae patri licet in filium.” (Hermijnard, no. 1053, 8: 293)